

平成 26 年度
発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援・教職員の専門性向上事業
(発達障害理解推進拠点事業)
成果報告書 (概要版)

実施機関名 (神戸市)

1. テーマ

すべての児童生徒が学習に参加し、学力と自己肯定感を高めることのできる授業・学級経営等の実践研究

2. 問題意識・提案背景

現在、小中学校では、発達障害等のある児童生徒が集団での学習や対人関係に困難さを示し、その後問題行動へと移行していくケースがある。通常の学級において学級担任ひとりの指導で、個々のニーズに対応することは容易ではない。学校現場では発達障害の可能性のある児童生徒の割合を 6.5%とは実感しておらず、実際にはもっと高い割合で支援の必要性がある児童生徒がいると感じている。経験の浅い教師が増えていることや、経験は豊富だが過去の自分のスタイルを変えることができず、子供たちの状態と乖離している教師も少なからずいること等、教師の指導力の課題もある。教師の指導力は、授業において、さらに生徒指導もふくめた学級経営で活かされるものだが、そこに的確な児童生徒の実態把握がなければ、教師側に意欲や思いがあっても指導はうまくいかない。したがって、特別支援教育の視点を取り入れた学級経営や授業づくりを進めていくことが必要である。

指定校 4 校園はともに神戸市H区にあり、兵庫くすのき幼稚園から全員ではないが、兵庫大開小学校と水木小学校へ、さらに兵庫中学校へ進学する。神戸地域においてこの地域は下町の雰囲気のある校区で、繁華街とも隣接している。生活環境としては共働き家庭が多く、幼稚園や学校が担う役割は多岐に渡っている。そのような環境の中、学力や学習の習慣が定着しにくいケースも多くみられ、中には二次障害につながることもある。

拠点地域をこの地域とした理由としては、これらの困難さを多く抱えながら、教職員の努力でこれまでやってきた学校が、その取組のねらいや支援のあり方の効果やよさを再認識するとともに、特別支援教育の視点を取り入れることにより、より子供たちにフィットした形での支援が可能になるのではないかと考えたからである。特別支援教育の考え方を取り入れることにより、二次障害を起こさせない、学習に向かう気持ちを育てる、つまりはまずは学習に参加すること、そして自己肯定感を高めることができる学級

づくり，学校づくりを進めていくことが迫られている。

また神戸市教育委員会では現在，特別支援教育支援員配置事業を展開している。本事業に対しては，学校からのニーズも高く，年々予算枠を増やして，支援員の配当日数を確保しニーズに応えている。支援員配置事業のうち，「LD 等への支援事業」は対象児を通常の学級に在籍している LD 等の支援を必要とする児童生徒としている。大学教授等の専門家による年 3 回の巡回相談と，特別支援教育を目指す教員養成課程の学生や臨床心理を目指す学生を「教員補助者」として配置している。本事業ではこの「LD 等への特別支援事業」とからめることで，実態把握から PDCA サイクルで研究を深めることをねらっている。

本事業をこの拠点地域で展開し，他の地域においても般化できる連携の在り方，授業や学級づくり，学校の取組等についてまとめることに意義があると考えている。

3. 拠点校について

○ 拠点校一覧

設置者	学校名（ふりがなを付すこと）
神戸市	<small>ひょうご</small> 兵庫くすのき幼稚園
神戸市	<small>ひょうごだいかい</small> 兵庫大開小学校
神戸市	<small>みずき</small> 水木小学校
神戸市	<small>ひょうご</small> 兵庫中学校

○ 理解推進地域内の学校一覧

設置者	学校名（ふりがなを付すこと）
神戸市	<small>ひょうご</small> 兵庫くすのき幼稚園
神戸市	<small>ひょうごだいかい</small> 兵庫大開小学校
神戸市	<small>みずき</small> 水木小学校
神戸市	<small>ひょうご</small> 兵庫中学校

4. 拠点校における取組概要

○兵庫くすのき幼稚園

神戸市の市立幼稚園では統合保育を推進し、障害のある幼児と障害のない幼児が共に暮らし学ぶことで、互いに育ち合うことを目指している。集団の中には支援の必要な幼児が少なくない状態であるが、教職員は幼児理解の研修や、同園に配置されている通級担当者の助言等もあり、子供たちに寄り添う支援を行っている。本事業では職員用図書を購入したり、大型絵本を購入したりしてさらに幼児理解を深めること、保育の中で子供たちの集中を高めたりコミュニケーション力を伸ばしたりすること、図書や絵本を参考にして教材作りをすることなどを実践した。さらに、兵庫大開小学校が取り入れている体幹を鍛える体操やあそびを幼児の発達段階に合わせて工夫し実践している。さらに小学校の教員が幼稚園を訪れ、幼児の描いた絵を見ながら研修会を開いた。幼児の発達の状況や背景等について話し合いながら共通理解を図った。また、中学生が幼稚園を訪れて幼児と触れ合う体験をしたり、避難訓練を共に行い手をつないで避難したりするなど日頃からも同じ地域に暮らす子供たち同士の関わりを大切にしている。

○兵庫大開小学校

〈実態把握〉

- ・全体的に語彙が少ない
- ・体の軸ができていない
- ・社会性の低さ といった点で難しさのある児童がみられる。

〈取組〉

- ・学校全体で体作りに取り組む。(ラジオ体操・30秒体操)
- ・支援員と共にプラスの言葉かけ・ほめる言葉かけを行う。
- ・トラブルが起きた際には頭ごなしに指導するのではなく、児童の話を受け止め、状況を説明したり対応の仕方を教えたりといった対応をする。

上記のような取組に重きを置き、学校全体で取組を続けた。プラスの言葉かけをすることで授業に参加しにくい他の子供たちも学習に参加するようになった。担任は支援員の言葉かけを参考に自らも積極的に実行するようになった。

巡回相談では、対人関係や物事のとらえ方に偏りのある児童が多いので、社会性を高めることが今後も必要との指摘があった。また通級指導教室やこうべ学びの支援センターとの連携を進めることになった。

新たに「1日1時間の授業で担任が何回ほめたか」を記録する取組を実施した。ほめることでほとんどの児童の授業参加率が上がった。また担任のほめる技術が高まり、良い雰囲気学級全体が落ち着いて学習に取り組んでいる。さらに授業のユニバーサルデザインの研修を始めた。また宿題の出し方を変え、量を調整したりドリルからプリントに変えたりして、取り組みやすいものに変更調整している。

○水木小学校

〈実態把握〉

- ・全体として社会性のスキルの低さ
- ・体が支えられない，聞くことに集中できにくい
- ・言語量が少なくコミュニケーションに課題がある
といった点で難しさのある児童がみられる。

〈取組〉

- ・個人や学年によっても傾向は違うがそれぞれの課題を明確にしたうえで，休み時間に積極的に遊ぶこと，できにくいことをとにかくできるように支援することを学級経営の中ですすめていく。また座席や組合せの工夫をする，声のトーンを変える，授業で子供をわくわくさせること，などの計画を立てた。学校全体としても，児童と一緒に過ごす時間を増やした。
- ・兵庫大開小学校と同じく，朝会での行進指導，朝の全校縄跳び・ラジオ体操を取り入れた。
- ・障害理解授業のために職員研修を3校合同で行った。また，4年1組での公開授業を実施した。子供たちが「ひとりひとり必要なことをして初めて平等」という考え方に触れ，障害がある人の気持ちに考えを寄せる機会となり，自分とは関係のないことではなく，真剣に考える様子が見られた。日頃から児童同士のつながりは強いが，さらに関係が深められるよう他の学年にも広げていきたい考え方である。

○兵庫中学校

〈実態把握〉

- ・昨年度から「ニーズチェック座席表」を使用し，①運動面②学習面③対人関係の3点について支援が必要と思われる生徒の座席に担任が入力し，それを見ながら巡回して頂いた。
- ・昨年度同様，教員が生徒に寄り添う取り組みが高く評価され，子供たちは本校を安心できる場所だと感じて生活しているとの指摘を頂いた。

〈取組〉

- ・小学校からの引き継ぎをもとに，日々の指導や就学に関しての話し合いを続けている。学習面で特に困難が強いケースは，通常の学級での観察と適切な学習支援を検討し，今後の方針を立てている。
- ・昨年支援員の協力を得た学年では，一定の成果があり，学年教員の良好な理解・スムーズな協力体制が得られた。
- ・学校全体としては，「ニーズチェック座席表」に支援員から聞き取った内容を毎回記録。全職員に回覧して情報共有。「ダイジェスト」という形で支援員がピックアップした良い支援の例を配布・職員室内に掲示した。

- ・こうべ学びの支援センターのカウンセラーによる巡回に、通級指導教室の先生にも同行してもらった。
- ・「LD事業ダイジェスト」と題して良い取り組みを紹介。配布・掲示を行った。また「特別支援ABC」と題して、特別支援教育の視点を取り入れた取り組み（タイムアウトカード、視覚的支援等）を配布・掲示で紹介した。さらに職員間の認知を高めるために校内での愛称を検討している。

○拠点3校コーディネーター連絡会開催

- ・毎月1回開催程度開催。各校の子供の様子を情報交換したり、研修担当も交えて必要な研修テーマを絞ったりすることで、拠点地域の学校園が現状や課題を共有することができた。参考図書を紹介し合い、本事業で購入した図書を職員室内や図書室内にコーナーを作って教職員の啓発に利用した。同じ図書を共有することで職員研修や教職員への啓発の資料としても活用ができるなど、同じ地域で教育に携わる者が共通の資料を手にすることができる機会ともなった。若手の職員が手に取り、特別支援教育コーディネーターに質問をしたり、授業づくりに取り入れたりするようになってきた。
- ・また、学習に向かう体づくりを目的として体幹を鍛える取組を幼稚園からの共通テーマとして取り入れ始めている。子供の実態に合っているという点でも、同じ視点で子供たちの姿を見ることができるようになったという点でも非常に効果的であった。

○「LD等への特別支援事業」連絡会開催

年2回開催 第1回 6月26日(木)・第2回 2月19日(木)

- ・神戸市の支援員配置事業である「LD等への特別支援事業」実施校の担当者と共に研究について話し合うことで他校の取組を参考にし、それぞれの学校での研究をより深めることができた。その中で、拠点地域での取組は、RPDCAのサイクルを明確に示すことのできる研究として参考になるものであった。R（実態把握）のために、より客観的な根拠として児童生徒の身体の動き、保健室への来室状況、けがの状況等に注目してデータを収集する学校も出てきた。また、通級指導教室等の関係機関と積極的に連携する事例も共有することができた。

○3校合同研修会開催「通常の学級における児童生徒への特別支援」

7月30日(水) 参加者100名

内容：関西学院大学松見先生の講演・教員補助者からの取組報告

3校の特支コーディネーターから取組報告

- ・夏季研修として3校の教職員がほぼ全員集まった。本事業についての説明（資料1参照）と兵庫中学校の巡回相談員である松見教授より通常の学級における発達

障害のある児童生徒についての理解や支援の方策について講義していただいた。教室で気になる児童生徒の行動と学習の問題について、またどのように児童生徒の授業への参加意欲を高めるかといった点について実践報告があった。合わせて、3校の特支コーディネーターが各校の取組についての紹介をし、目標や課題を共有することができた。

○小学校教育課程研究協議会において実践報告

8月1日（金）参加者 170名

テーマ：「目の前の子供たちとインクルーシブ教育システムの構築」

特別支援教育課指導主事より

発表：「通常の学級での取組」

兵庫大開小学校特支コーディネーターより

- ・夏休みに行われる小学校教育課程研究協議会には、ほぼすべての小学校から参加があるため、絶好の発信の機会と捉えている。その中でインクルーシブ教育システムの構築について、さらに共生社会の形成に向けて各校で取り組んでもらいたいこと、教職員の専門性向上等について説明を行った。（資料2参照）さらに兵庫大開小学校が行っている、通常の学級でのさりげないけれど大切な支援（児童一人一人に合った支援や環境の調整等）をユニバーサルデザインの授業づくりの視点と合わせて紹介した。一生懸命子供と関わっているのになぜうまくいかないのだろう。学校全体でどのように取り組んだらいいのだろう、といった問題提起からグループに分かれて討議を行い、会場に集まった参加者がそれぞれの学校や学級で取り組んでいることを意見交換し、さらに協議が深まった。

○夏期集中セミナー「生徒指導と特別支援教育」

8月7日（木）参加者 400名

関西国際大学百瀬准教授・教育委員会生徒指導係首席・

兵庫中学校長・同校特支コーディネーターによるシンポジウムを実施

- ・夏期集中セミナーは特別支援教育課主催の期間中12講義を企画する研修会である。その中でどの校種にとっても関心の高いテーマであり、一番の申し込み人数があった。本事業の拠点地域においては特に重要なテーマであるため、その校の校長を始め特別支援教育コーディネーター、さらに教育委員会生徒指導係首席指導主事が揃い、話し合うという設定に関心が高かったとみられる。生徒の実態把握、寄り添う姿勢、頭ごなしの指導をしないことなど、一人一人のニーズに合った支援を行う考え方を具体的に伝えてもらった。拠点地域のような指導に困難さを感じる地域でこのような取組が効果的であるという実践を示したことで、参加者にとってより深い実感をもって理解してもらえたと考えている。
- ・また、学校経営の立場からも特別支援教育の視点を大切にすることの重要さや、

管理職のリーダーシップの重要性、各校で特別支援教育の文化を作っていくことの大切さ等を伝えることができた。

○H区合同研修会「通常の学級における児童生徒への特別支援」

9月30日（火）参加者約80名 特別支援教育課指導主事

- ・拠点地域を含むH区内のすべての学校が集まる研修会を実施。ここでも拠点地域の取組を紹介し、通常の学級において幼児児童生徒の実態の把握をすることの重要性を伝えた。中でも学力学習状況調査の結果を踏まえ、児童生徒のつまずきのポイントを説明した際には反応が大きかった。資料1を配布し、授業づくり、学級づくりの際に子どものとらえ方や学び方の違いに目を向けることを特別支援教育の視点として紹介した。

○神小研通常の学級部「授業のユニバーサルデザイン」

9月9日（火）参加者約30名 特別支援教育課指導主事

- ・神戸市独自の研究部組織の研修会において、授業のユニバーサルデザインをテーマに講義を行った。この研修会の前にある小学校で行った職員研修を実例に授業づくりについて紹介した。教科・教材についての研究と合わせ、学級を構成している一人一人の実態を知ることが大切であることから、誰もが参加でき分かる授業を目指すことは教職員にとっては真剣に授業と向き合うことであると伝えた。ユニバーサル研究会のキーワードを使って、授業の工夫を意識付けるようにしたが、その後そのキーワード（視覚化・共有化・焦点化）を校内に広げたり、指導案作成の際に取り入れたりする学校があった。他にも参加者がそれぞれの所属校で取組を始めている。

○教育課題対策セミナー

11月22日（土）参加者約40名 特別支援教育課指導主事

テーマ：安心と自信を育てる授業づくり・学級づくり

- ・学力学習状況調査の結果を踏まえ、特別支援教育の視点から誤回答を読み解く。一人一人のつまずきの予測をもとに授業づくりを行うことや、自己肯定感を高める取組、まず「先生の話をお聞きしようと思う・勉強してみようと思う」気持ちを育てる取組等を紹介した。
- ・兵庫中学校の生徒指導の考え方や生徒への関わり方を紹介した。やろうとしていることを認める、今できていることをほめるといった、さりげないけれど生徒の気持ちを学習に向けることができる関わりは、大いに参考になったと参加者からのアンケートにあった。

○障害理解授業の開催

1月19日（月）職員向け模擬授業 参加者約35名 会場 水木小学校

1月22日（木）水木小4年1組での公開授業

たんぼぼ学級（特支学級）での公開授業

目的：特別支援学級の児童生徒と通常の学級の児童生徒がより安心して共に学ぶ社会になるために、相互理解を深める（資料3参照）

講師：村上公也氏

- ・通常の学級と特別支援学級の子供たちは日常的に交流及び共同学習を通して互いの理解を深めている。通常の学級の子供たちが特別支援学級の子供たちを本当の意味で理解できているか、は発達段階等にもよりさまざまであるが、同じ地域に暮らし、共に学ぶ仲間として自然なつながりを築き上げてもいる。「障害理解授業」として設定した授業において、キーワードは「一人一人にぴったりのことをして初めて平等」というものだった。誰かにぴったりのことはひょっとしたら自分には要らないことかもしれないし、不思議に思えることかもしれない。でもぴったりのことをして初めて勉強ができ、移動ができ、暮らしていける。そんなことが自然と子供たちの心の中に入り込んでいくような授業であった。大人にとっては、合理的配慮の考え方の原点であるとの思いを抱いた。各校の状況に合わせ、この言葉をうまく取り入れて授業づくりをしていきたいと思った教員が多かった。
- ・職員向け模擬授業の中では、プロの教師として子供たちを「その気にさせる」ことが必須であること、そのために効果的に「ほめる」ことが強調されていた。どの拠点校も「ほめる」ことを第一に大切にしている学校であるため日頃の取組の重要性をさらに実感することができた。プロの教師として「ほめ方」を実践の中で研究し高めていくことが必要との助言もあり、まずは「やってみよう」そして「できた・わかった」につながるユニバーサルデザインの観点での授業づくりを推進していくことが今後必要であると感じた。

○先進地域校への視察

日時：2月7日（土）

参加者：兵庫大開小学校長・同校特別支援教育コーディネーター

水木小学校長・兵庫中学校長・同校特別支援教育コーディネーター

指導課初等教育係指導主事・特別支援教育課主事 計7名

視察地：東京都日野市立日野第三小学校

内容：「国語科授業のユニバーサルデザイン～文学的な文章の読解を通して」

- ・拠点地域と地域や児童の様子、職員構成はそれほど変わらない。しかし高学年の児童の姿には成長がはっきりとみられた。若い職員集団でも職員研修の充実や校内の通級と連携しながらの実践は大いに参考になった。数人の教職員だけが発信しても全体には広がっていかない。管理職の先生方をお連れしての視察としては、

教職員の意欲・意識向上のために各校の管理職がどう方向性を示していくかという点に着目していただきたいというねらいもあったが、その点については3名の校長先生が往復の行程でしっかりと話し合いを持たれていた。また、ユニバーサルデザインの授業という考え方の理解を深めることもできた。国語担当主事とは教科指導のねらいとの整合性や授業づくりで共通するポイント等の確認ができた点では特に有意義だった。

○文科省「合理的配慮普及推進セミナー」への参加

日 時：2月17日（火）・18日（水）

参加者：特別支援教育課指導主事 2名

- ・合理的配慮の具体例等の報告
- ・日野市立日野第三小の取組については京極校長先生の報告から、校内研修の充実や特別支援教育の視点を取り入れることが非常に効果的であると感じた。

○特別支援教育コーディネーター連絡会での3校の実践報告

日 時：2月23日（月）

参加者：約300名（小・中学校の特別支援教育コーディネーター）

発表者：兵庫大開小 特別支援教育コーディネーター

水木小 特別支援教育コーディネーター

（概要と兵庫中の取組については特別支援教育課主事より）

- ・文科省事業の概要について説明し、各校の取組を紹介した。兵庫大開小からはR P D C Aのサイクルに合わせた取組の発表があった。実態把握の一つとして登校時の服装や表情といった、他校にもすぐに取り入れられる内容があった。水木小からは特別支援教育コーディネーターとしての1年間の動きを中心とした発表があった。気になる子供たちを職員の意識や授業の工夫で支えていこうとする学校全体の取組が非常に参考になったと思われる。

○発達障害理解専門性向上専門家会議

日 時：2月23日（月）

参加者：松見教授、百瀬准教授、兵庫くすのき幼稚園長、兵庫大開小学校長、水木小学校長、兵庫中学校長、指導課生徒指導係首席指導主事、指導課指導係指導主事、特別支援教育課長、特別支援教育課首席指導主事2名、指導主事

- ・拠点校の校園長より今年度の取組についての報告。児童生徒だけでなく教職員の変化を具体的に伝えていただいた。巡回相談員（専門家）には各校の取組を評価していただき、教職員の努力や苦勞、児童生徒の変化をふまえ、今後の取組向けの助言をいただいた。実態把握に基づいた取組、教職員の意欲等、管理職の

ーダーシップなどが効果的に結びついており、今後の課題としてはこの状況を維持すること、との示唆があった。

さらに特別支援教育課以外の指導主事が参加し、拠点地域の取組を知ってもらう機会となり、より多くの機会をとらえて発信していくことが必要との意見をいただいた。

○平成 26 年度の取組の概要まとめ

- ・LD 等への特別支援事業 指定校 21 校より報告が提出されたものを冊子として作成。(資料 4 参照) 冊子をもとに指定校 21 校の担当者連絡会を開催し、取組の発信と情報の共有を図った。(前述の「LD 等への特別支援事業」連絡会) 拠点校 3 校と同じ課題を有する学校をひとつのグループにし、小学校と中学校が課題を共有して取り組むことの効果やその方策などについて、冊子をもとに話し合う機会を設けた。拠点地域の取組が、状況の似た地域で取り入れやすいモデルになると思われる。

<参考資料>

資料 1 文部科学省事業概念図

資料 2 小学校教育課程研究協議会資料

資料 3 発達障害理解授業まとめ

資料 4 平成 26 年度取組の概要まとめ (該当 3 校のみ抜粋)

5. 主な成果

○拠点校における児童生徒や学級の変化

- ・行動面での逸脱が目立つ児童に対し、担任がこれまでよりも余裕をもって関わるようになった。飛び出す行動を押さえるより、児童の実態を把握したうえで対応することの方が効果的であることを担任が実感している。そのような関わりを続けることで、本人も一旦教室を出ても短時間で戻ってくるようになり、周囲の児童もそんな友達の様子を肯定的にとらえるようになってきている。これは拠点地域のすべての学校でみられる変化であり、小学校においても中学校においても大切な関わり方であるということが実証されたと感じられる。それは「この学校の先生は話を聞いてくれるから好き」という児童の言葉にも表れている。このように、自己肯定感を下げさせないことが拠点地域において特に重要であり、児童生徒の落ち着きが増してきた、そして学習に取り組める児童生徒が増えてきたといった点で各校の教職員が実感している。
- ・静かに全校朝会ができるようになり、「今週もがんばりましょう」などの語りかけに対して、子供たちが「はい」と返事できるようになってきた。教師に対して、反抗的・攻撃的な態度を取ることがなくなってきた。

- ・また、教室に入りにくい児童生徒が教室に入れるようになってきたケースもある。自分が受容されているという安心感が持てるようになったと思われる。

○拠点校における教職員の変化

- ・担任だけでなく、学校の教職員全体が同じようにほめることを意識するようになり、学校の中で大きな声で怒る指導はめったにみられなくなった。特に兵庫中学校での指導の在り方は大きく変わった。学校が静かになった、との感想も寄せられた。
- ・保健室へよく来室する児童生徒を把握したり、登校時の服装や表情にもアンテナを立てたりして、子供たちを理解しようとするようになっている。頭ごなしに指導するのではなく、子供たちの背景を理解し、柔軟な対応ができる職員集団になってきている。
- ・教室前面の掲示物をすっきりとさせて授業に集中できるようにしようという考え方が職員の中から出てきて、職員同士声をかけたり話し合ったりするようになってきた。視覚的に支援をするために視覚的な教材を増やす、という発想だけでなく、安易な視覚支援よりも、どのような教材や提示の仕方が効果的かを考え、不必要な情報を減らすという発想も併せて持てるようになってきている。
- ・児童生徒の良さに常に注目する雰囲気になり、「今日〇組の〇〇、こんなこと頑張っていましたよ」「そう言えば、□組の□□もあんなこと頑張っていたよ！」等の会話が職員室で頻繁に聞かれるようになっている。

○拠点校における学校の変化

- ・数値的に表すことは難しいが、「学校が落ち着いてきた」という実感がある。また授業に向かう子供たちの姿勢が変わってきたという教職員の実感はある。また、「この学校の先生は話を聞いてくれるから好き」という子供の言葉にもあるように、児童生徒が安心して暮らすことのできる学校・学級づくりはこれまで以上に進んでいる。
- ・配慮のいる児童や担任が気になる児童のことを特別支援教育コーディネーターに、ちょっとしたエピソードでも相談するケースが増えた。また、保護者からの相談も増え、担任だけで支援するのではなく、学校全体で支えていく雰囲気になってきた。
- ・本事業の取り組みが定着してきており、兵庫中学校においては「ニーズチェック座席表」の入力・プリントアウトの流れがスムーズになったり、特別支援教育コーディネーターが出張等で不在であっても、支援員と学年主任とで通常通りの打ち合わせが行われ、座席表への記録も主任が代行したりする等の協力が得られるようになった。
- ・学校図書館に新設した「ユニバーサル・プロジェクトコーナー（仮称）」に配置した特別支援教育関連の図書を手に取ったり、読んだりする教員が多数見られ、関心の向上が伺える。

6. 今後の課題と対応

- ・学習に向かうことのできる気持ちと身体を今後も一層育てていくとともに、次のステップは学力の定着である。教員の授業力向上がさらに求められている。
- ・特別支援教育の視点（とらえ方や学び方の違いを理解すること）をもとに、児童生徒の実態把握を掴むことができるように、まずはその視点を伝えていく。そのために、巡回相談員からの助言を得る機会を設定する。
- ・具体的に授業をどうするのか、といった点では「授業のユニバーサルデザイン」の視点を取り入れる。焦点化、視覚化、共有化といったキーワードを提示し、教科指導の視点と、特別支援教育の視点の融合を図る。そのために、各拠点校の研修等にユニバーサルデザインの授業づくりの観点を取り入れ、授業研究の際に児童生徒の実態把握の資料等をもとに、つまずきの予測をすることや、さきほどのキーワードを授業研究の際に協議の観点として取り入れるなどの工夫を行う。
- ・「授業のユニバーサルデザイン」の内容を含んだ研修会を開催したり、特別支援教育課から発信したりする機会を設ける。
- ・上記のような内容をまとめ、教職員に配布する資料を作成する。

7. 問い合わせ先

組織名：神戸市教育委員会事務局特別支援教育課

- (1) 担当部署 推進係指導主事 鳥飼 由佳
- (2) 所在地 神戸市中央区加納町6-5-1
- (3) 電話番号 078-322-5788
- (4) FAX 番号 078-322-6159
- (5) メールアドレス yuka_torikai@office.city.kobe.lg.jp